今月の読み物

「見たり、聞いたり、探ったり」No.284

通算 No.435

青　木　行　雄

国宝「臼杵（うすき）、磨崖仏（まがいぶつ）」史跡探訪
（大分県臼杵市深田）

※「山の岩肌に刻まれた巨大な60余体の御仏たちが、千年の時を超えた現世の世を無言のまま見つめている。」

この臼杵の石仏、誰が何時、何のために彫ったものか、謎なのであるが……。

この石仏は1952年（昭和27）３月29日に国の特別史跡として、次に1995年（平成７）６月５日に重要文化財から「国宝」に昇格して指定をうけた。１つの物件で特別史跡と国宝に二重指定されていることは全国でもめずらしい。

※国宝に指定される条件を調べて見ると、

文化財保護法によると

※「世界文化の見地から価値の高いもので、類のない国民の宝となるもの」でさらに「古さ、美しさ、歴史的価値」があるもの、とされている。

令和２年時点、全国で1,124件指定されていた。

※この「臼杵石仏」は彫刻の分野で指定された。

彫刻の場合にはさらに「誰が、何時、何のために」という歴史的背景が求められるが、臼杵石仏

大分県の地図、臼杵石仏の場所です

現地の石仏配置図です。くわしく書いたのはNo.4古園石仏です

入口の臼杵石仏立カンバン石。すっかり整備されている

４ヶ所ある、４番目の石仏の場所。観光整備がいきとどいていた

はこの条件は詳しくわかっていない。

※仏像彫刻の国宝は、奈良東大寺の大仏、興福寺国宝殿の阿修羅像、宇治平等院の阿弥陀如来坐像など140件あるようだ。

※別の国宝で参考までに城跡を上げると、戦国時代から江戸時代にかけて築城され現存する12城のうちで、姫路城、松本城、松江城、彦根城、犬山城の５城の天守閣がある。

※大分県内の国宝を上げてみると「宇佐神宮の本殿」と「建屋と孔雀文磬（仏事用に小さな鐘）」、豊後高田市の「富貴寺大堂」、この「臼杵石仏」の４件であった。

この大分県「臼杵石仏」正式には「臼杵・磨崖仏」の概要について

臼杵石仏は、阿蘇カルデラの９万年前に噴火した凝灰岩の岩壁に刻まれた磨崖仏群である。平安時代後期から鎌倉時代にかけて彫られたと言われているが、誰が何のために造立したか、今なお謎のまま、特別国宝として受理されている。それだけ価値の高い存在かもしれない。一般的には「臼杵石仏」と言うが国宝の名称は「臼杵磨崖仏」といい、磨崖仏とは岩壁の表面に彫られた仏像の事で動かすことのできない仏像をいう。

磨崖仏はガンダーラや敦煌等のものが有名であるが国内では磨崖仏の約７割は大分県にある。大分はすごい特別な県だと思う。

臼杵石仏は写真のようにホキ石仏第一群、ホキ石仏第二群、山王山石仏、古薗石仏の４群からなり、そこの61体の磨崖仏像が全て国宝に指定されている。紙面ではなかなか説明がむずかしいので仏像に興味のある方は是非現地に行かれ本物をしかと見て観察下さい。

その１部の第４群の「古園石仏」について、記して見ると。

この石仏は、古園十三仏と入口の壁上にある２体の金剛力士像からなる、この十三仏は上下約４m、左右幅約18mの岩肌の表面に並列に彫られている。これは金剛界の大日如来像を中心に左右２体ずつ如来像、菩薩像、さらにその外側に２対の天部像を守護神として配置した立体の曼荼羅と考えられ、他に例のない独特の配列という。

この十三仏の入口の崖の上に約７m、左右12mの壁面に金剛力士仁王像が彫られている。

古園十三仏、中央の大日如来像は総高2.8mで五智宝冠を戴き、智拳印を結んでおり、ひときわ優れた

頭部が修復された仏像

修復前の仏像。このように何十年か落ちたままになっていた

造形であり、仏像としての形状、大きさ、醸し出す荘厳性など、いずれの方向から見てもこの大日如来像が臼杵石仏の象徴的な磨崖仏といえる。

現在の大日如来像を見てみると頭部にはほとんど亀裂や風化は認められない。頭部の重量は300kg程度あり、約３ｍも落下して損傷したのは王冠部だけであった。大日如来像の王冠部は一部消失して修復できていないが顔の部分はほとんど無傷である。これはもともと火山噴火による変化の多い地層の中で、特に中心となる大日如来の頭部は、溶結凝灰岩の固い位置を選定して彫っていたものと考えられる。

その他の仏像も岩の固さを十分に配慮して、頭部や顔面には亀裂が起こらないように工夫し、腹部や脚部は粘土部で軟らかいため、寄せ木細工のブロック工法を使用するなど技術の高さを示している。

これは900年前の平安後期に、すでに都の仏師と地元の石工の技術の融合など最新の技術を駆使していたことを示しているというから900年も前にすごい技術の接点があったと考えられる。

あらためて、十三仏を見ると中央に金剛界の大日如来が智拳印を結んでおり、向かって右に阿弥陀如来、不空成就如来、左に阿閦如来、宝生如来の五智如来を配している。さらに右側に普賢菩薩と観音菩薩、続いて隆三世明王と立像の多聞天、左側に文殊菩薩、勢至菩薩、続いて不動明王と増長天の立像が並んでいる。この配置は金剛界の密教曼荼羅を立体的に表したものとして、右側に慈悲、左側の智慧の面から仏の社会を表わし、仏教の力により国家の安寧、一族の繁栄、住民の安定を望んでいる様と考えられる。

私が15年程前に見学に行った折はこの中央の大日如来の頭部が地面に落ち、そのまま安置されていた事を思いだした。

この古園石仏の頭部がいつごろ落下したのか明らかではないが、特に鎌倉時代以降の豊後国は地域が小さく分割されて統治されていたので、室町時代や戦国時代では戦いが多く、地域の信仰を保護するような施策が顧みられなかったと考えられている。

いろいろの資料によって江戸時代の初期までは大日如来の頭部は仏像のそのままの姿だったと考えられる。頭部が落下したのは富士山の大爆発に関連した南海トラフによる宝永の地震（1707年）で当時臼杵でも震度５から６の記録が残っていることから、この地震により、頭部の落下が考えられると資料に書かれている。

近隣の歩道。かなり整備され、歩きやすい

仏像をながめる観光客。露天にあった仏像を屋根の下に修復した

臼杵石仏が再び脚光を浴びるようになったのは約100年程前の大正３年（1914）に京都大学考古学研究室の小川琢治教授（ノーベル賞の湯川秀樹教授の実父）の調査と研究から始まりそのすばらしさから瞬く間に学者仲間でその存在が知れ渡った。これは日本サッカー協会のシンボルマークのヤタガラスをデザインした臼杵出身の彫刻家日名子実三さんが東京芸大の学生の時に「臼杵には岩に彫った仏が沢山ある」との話をしたことが契機になったといわれている。

その後、昭和９年（1934）に国の史跡に指定されるが、日中戦争、太平洋戦争などにより保全活動などが中断されることになり本格的な保全と修復は戦後の昭和30年頃から始まった。保全と修復の主な点は、岩の表面の剥落防止と岩石の劣化を防止するために、背面の地下水の浸透水をどのように効率よく排水するかであり、それぞれの専門家の指導を受けて、石仏の景観などに影響しないように多方面から処理されている。

大日如来の保全の方法について、市民が親しみを持っている頭部を落下のまま、地上に置くか、創建時のように元の位置に復位するか、臼杵市民を上げて大論争になり、意見は別れたが、国宝指定の条件が復位であったことから保全された。

大日如来頭部の復位が平成５年（1993）に完成され、臼杵磨崖仏の59体が平成７年（1995）に国宝に指定され、その後、平成29年（2017）に古園石仏群入口の金剛力士仁王像の２体が追加指定され、61体の磨崖仏がすべて国宝に指定されたのである。

※仏像の見分け方を勉強し、見学する時に参考にしてほしい。

仏像には、「如来」、「菩薩」、「天部」、「羅漢」の４階級がある。

１※「如来」は悟りを開いた最高の仏である
　釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来などがある。

２※「菩薩」は自らの悟りを求める一方、衆生を救い、導こうとする仏を表す観音菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩などがある。

３※「天部」は如来や菩薩を仏敵から護る働きをする仏であり、不動明王、毘沙門天、大黒天などが挙げられる。

４※「羅漢」は修行僧で五百羅漢などがある。

ガイドとなった広川氏、幸せそうな満面の笑顔である

印相について
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ →① ② の順に説明書きがあります

１の、如来像は、悟りを開いた仏像であることから、頭頂部にこぶ状の知恵袋があり、さらに頭髪が螺髪（パンチパーマ）という丸くて縮れた毛髪で着衣は簡素な作務衣をつけている。

例外として大日如来は、全宇宙を司り、全知全能を有することから、他の如来と区別し、五智宝冠を戴いている。

２の、菩薩像は悟りを開く前の仏像として、釈迦が出家する前はインドの王子であったことから、王子の時代の服装をして、王冠、首飾り、イヤリングなどの装身具など身につける暇はなく、坊主頭になっている。

３の、天部像はインドの神々が仏の教えに共感し仏教に帰依した者で、仏の社会を護るために何時でも戦えるように、不動明王に見られるよう相手を威圧するように憤怒の表情で怒っており、鎧で身を包み、金剛杵、弓矢、刀などを持っている。

４の、羅漢像は、一般の僧侶の姿で剃髪で僧衣を纏っている。

印相について

印相は仏教において、手の指で様々な形を作り、如来・菩薩などの諸尊が内に秘めた思いを標示するものとされている。

１．「施無畏印」（せむいいん）

手を上げて手の平を前に向けた印相

「恐れなくてよい」と相手を励ますサインである。

２．「与願印」（よがんいん）

手を下げて手の平を前に向けた印相、相手に何かを与える仕草を模したもの。

３．「定印」（じょういん）

坐像で、両手の手の平を上にして腹前（膝上）で上下に重れ合わせた形、これは仏が瞑想に入っていることを指す印相。

４．「智拳印」（ちけんいん）

左手は人差し指を伸ばし、中指、薬指、小指は親指を握る。右手は左手人差し指を握り、右親指の先と左人差し指の先を合わせている。大日如来（金剛界）、多宝如来などが結ぶ。

５．「説法印」（せっぽういん）

釈迦如来の印相の１つで、両手を胸の高さまで上げ、親指と他の指の光を合わせて輪を作っている。手振りで相手に何かを説明している仕草を模したもので「説法印」ともいう。「真理を説く」ことの比喩である。

６．「降魔印」（こうまいん）

地面に指先が触れるような形をしている。釈迦が悟りを開くときに、悪魔に妨害を受けたが、この印により悪魔を降伏させ、退散させたために降魔印と呼ばれている。触地印（そくちいん）とも呼ばれている。

７．「施無畏・与願印」（せむい・よがんいん）

１．２．と合わせた形で、坐像の場合は左手の平を上に向け膝上に乗せる。これは信者の願いを叶えようというサインである。施無畏与願印は、如来像の示す印相として一般的なものの１つである。

私のふるさとの大分県、今まで２～３度この臼杵の石仏は見学し、多少の知識はあったが今回私の友人、広川宗生氏が長年東京で暮らし、大会社を退職定年となった。これを機会に故郷に帰り、この石仏のボランティアガイドを始めたと、連絡があった。

さっそく、機会を利用して、彼のガイドぶりを拝見した。すばらしいガイドぶりで彼がまとめた小説も頂いた。私が写した写真も入れて、「国宝臼杵石仏」をまとめてみた。

この石仏「臼杵磨崖仏」がいかにすばらしいか、改めて認識した所である。しかも国内では磨崖仏の約７割が大分県にあると聞き、これ又、大分の新発見といえる。

この小説が少しでも観光の参考になれば幸いである。

記　令和５年10月15日

参考資料

広川宗生ガイドブック